

# チンギス・カンとジョチ・カサル

宇野伸浩

(受付 2012年11月8日)

## 目次

1. はじめに
2. ジョチ・カサルの人物像
3. ジョチ・カサルの功績
4. チンギス・カンとの対立
5. ジョチ・カサルへの分封
6. ジョチ・カサルの死
7. まとめ

## 1. はじめに

近年、欧米においてモンゴル帝国研究、チンギス・カン研究の進展は著しく、多くのチンギス・カン研究の著書が出版されたが<sup>1)</sup>、それらの研究においてチンギス・カンのすぐ下の弟であるジョチ・カサルは、あまり重視されていない。しかし、筆者は、チンギス・カンがモンゴル帝国を建国するにあたってジョチ・カサルが果たした役割、とくに戦闘において果たした役割は大きかったと考えている。それにもかかわらずジョチ・カサルの存在が諸史料において、とくに『元朝秘史』において重視されていないのは、ジョチ・カサルとチンギス・カンの間に起きた対立が原因ではないかと考えている。

筆者は1991年に一般向きの雑誌に「兄の覇業を支えた勇猛なる弟たち」(宇野伸浩1991a)という文を書き、その中でジョチ・カサルを取り上げたことがあるが、文章の性格上、史料を逐一挙げて論証をするという形を取らなかった。そこで、内容的には重複するが、本稿において史料に基づき論証しつつ述べてみたい。

また、『元朝秘史』と『集史』の史料的な性格の違いについては、吉田順一による一連の研究、岡田英弘による研究があり<sup>2)</sup>、筆者も近年「チンギス・ハン前半生研究のための『元朝

---

1) Allsen 1994, Biran 2007, Lane 2004, Man 2004 (邦訳マン2006), Weatherford 2004 (邦訳ウェザーフォード2006).

2) 吉田順一 1968, 吉田順一 1986, Yoshida 1992, 吉田順一 1993, 吉田順一 1996, 吉田順一 2005, 吉田順一 2009a, 吉田順一 2009b, 吉田順一 2011. Okada 1972, 岡田英弘 1986.

秘史』と『集史』の比較研究<sup>3)</sup>を発表し、『集史』『聖武親征録』『元史』にもとづいてチンギス・カン研究を再検討する余地があることを述べた。本稿も、この方針にそった研究の一環として位置づけられるものである。

## 2. ジョチ・カサル的人物像

チンギス・カンの父イエスゲイ・バートルと母ホエルン・エケの間には、4人の息子が生まれ、チンギス・カンは長男であり、次男がジョチ・カサル、三男がカチウン、四男がテムゲ・オッチギンである。では、次男のジョチ・カサルとは、どのような人物だったのであろうか。『集史』に、

(イエスゲイ・バートルの) 2番目の息子はジョチ・カサル (Jūjī Qasār) だった。ジョチは名前であり、カサルの意味は「勇猛な」である。怪力の持ち主で非常に威厳があったので、その特徴をもって呼ばれていた。(『集史』イエスゲイ・バートル紀, Rašīd/Узбекистан 1620, fol.50b; Rašīd/Топкари 1518, fol.59a; Rašīd/Rawšan p. 275)

とあり、「カサル」は「勇猛な」という意味であり、彼が怪力の持ち主で非常に威厳があったために「カサル」と呼ばれていたことがわかる。さらに、『集史』には次のように述べられている。

彼の肩と胸はとても広く、胴はとても細かったので、彼がわき腹を下にして寝ていたとき、犬が彼のわき腹の下を通り抜けたほどであった。彼の力は、人を両手でつかみ、矢の柄のようにその人の背骨を折って二つにしてしまうほどであった。(『集史』イエスゲイ・バートル紀, Rašīd/Узбекистан 1620, fol.50b; Rašīd/Топкари 1518, fol.59a; Rašīd/Rawšan p. 275)

この記事から察すると、ジョチ・カサルは筋骨隆々たる怪力の持ち主であつたらしい。また、『元史』巻117、別里古台の列伝に、

帝嘗曰「有別里古台<sup>ベルグテイ</sup>之力，哈撒兒<sup>カサル</sup>之射，此朕之所以取天下也。」

とあり、チンギス・カンが、遊牧諸部族の統一と周辺諸国の征服に成功した理由の一つとしてチンギス・カンの異母弟ベルグテイの能力とともにジョチ・カサルの射撃の威力をあげており、ジョチ・カサルが弓の名手であったことがわかる。

さて、『集史』には、ジョチ・カサルについて、一つの興味深い話が出て来る。それによると、バヤウト族のある老人が、チンギス・カンが将来カンになることを予言したとき、有力な対抗馬の一人としてジョチ・カサルの名を挙げたというのである。それが『集史』「チンギス・カン紀」の次の記事である。

---

3) 宇野伸浩 2009.

当時、バヤウト族に洞察力のある賢い老人がいて、こう言った。『キヤト・ジュールキン族のセチェ・ベキ (Seče Bīkī) は、王になりたいという望みを持っている。しかし、彼には無理であろう。ジャムカ・セチェン (Jāmūqa Sāčān) は、いつも人々の仲を悪くさせ、事を進めるために様々な策略と虚偽を用いているので、彼にも実現できないだろう。チンギス・カンの弟のジョチ・バラ、すなわちジョチ・カサル (Jūcī Qasār) も、そのような望みを持っている。彼は、自らの力と勢力と矢を射る腕前で認められている。しかし、彼にも手が届かないだろう。メルキト族のアラク・ウドル (Ālāq Ūdūr) は、リーダーへの願望があり、権力と偉大さを誇示しているが、彼にも進展はないだろう。このテムジン——すなわちチンギス・カン——は、リーダーとなり王政を行なうにふさわしい容貌と振舞いと能力を持っている。まさにこの人が王位に到達するであろう』と。この言葉をモンゴルの節にのって韻を踏んだ作品として言った。ついに彼が言ったようになった。チンギス・カンは王となり、自分の弟を除いて、それらの人達を殺した。(『集史』チンギス・カン紀, Rašīd/Торқары 1518, fol.80b; Rašīd/Rawšan, pp. 375–376)

これと同じ話は、『集史』部族誌のバヤウト族の項にも記されている。そこにはバヤウト族の洞察力のある賢い老人とは、チンギス・カンに仕えていたソルカンという名の人物であると記されている<sup>4)</sup>。上の史料は、モンゴル族とその周辺の遊牧諸部族の次世代のリーダーとみなされる人物が、テムジン以外に複数いたことを示す興味深い重要な史料である。この史料によると、誰が遊牧諸部族を統一するカンになるかをめぐって、キヤト族のテムジン以外に、テムジンの弟ジョチ・カサル、ジュールキン族のセチェ・ベキ、ジャジラト族のジャムカ・セチェン、メルキト族のアラク・ウドルの名が挙げられており、これらの人物がチンギス・カンの有力なライバルと見なされていたことがわかる。ジョチ・カサル以外のライバルは、次々と滅ぼされていったが、弟であるジョチ・カサルは残った。そのジョチ・カサルをチンギス・カンがうとんじるということは十分ありえることである。

ジョチ・カサルが、上述のように筋骨たくましい射撃の名手で武力に優れた武将であったのに対し、チンギス・カンは、武力において優れていたわけではないが、王にふさわしい容貌と振る舞いと能力を持っていたらしい。チンギス・カンがジョチ・カサルのような武力に優れた武将をどのように評価していたかを知る上で、『集史』チンギス・カン紀のチンギス・カンのピリグのひとつに挙げられている次のチンギス・カンの言葉が興味深い。このピリグは、チンギス・カンが、ジョチ・カサルのように身体的能力が高い勇猛な武将より、軍隊の

4) 『集史』部族誌には「チンギス・カンの時代にソルカン (Sūrḡān) という名で、チンギス・カンのオクチ (ūkjī) がいた。」とある (Rašīd/Али-заде 1-1, p. 464)。トルコ語で「矢」あるいは「荷車の輻」のことを「オク」といい、「矢を作る人」あるいは「弓の射手」を「オクチ」という。なお、部族誌にでてくるこのエピソードには、次世代のリーダーとして、アラク・ウドル、セチェ・ベキ、ジャムカ・セチェン、テムジンをあげているが、ジョチ・カサルが挙げられていない。

状態を的確に判断できる智将の方が軍隊のリーダーにふさわしいと考えていたことを示している。

また〔チンギス・カンが〕言った「いかなる人でもベストほど勇敢な者はいない。腕前において彼のような者は他にいない。彼は遠征の困難さに苦しむことはなく、彼自身は渴きや飢えを知らない。彼は、同行する従者や軍人ら他の者もみな、自分と同じく辛苦を耐えることができると思うが、彼らには耐えることができない。だから、彼は軍隊の指揮官にはふさわしくないのである。軍隊の指揮官にふさわしい者は、自分の飢えと渴きから判断して、他人の状態を推測し、道中は計算して進み、軍隊を飢え渴いたままにせず、家畜をやせたままにしない者である。(後略)」と。(『集史』チンギス・カン紀, Rašīd/Topkapı 1518, fol.126b; Rašīd/Rawšan, p. 585)

なお、ジョチ・カサルについてよく言及されるのが、『元朝秘史』76～78節に登場する、テムジンとジョチ・カサルが協力して異母弟ベクテルを殺害したという話である。しかし、異母弟ベクテルについては、『秘史』以外の史料に全く記載が無く、『元朝秘史』でも、この3節だけに登場するため、実在した人物かどうか疑わしい<sup>5)</sup>。

### 3. ジョチ・カサルの功績

チンギス・カンとジョチ・カサルは最初から対立していた訳ではない。むしろチンギス・カンにとってジョチ・カサルはもっとも頼みになる味方であり、重要な場面でジョチ・カサルの戦力によってチンギス・カンは勝利を得ている。例えば、『集史』に次のような話がある。

その事件の後、同年(1199)の冬に『ブルクジンの方へ逃げていたメルキト族の王トクタイが再び出て来た』という噂が耳に入った。チンギス・カンはジョチ・カサル(Jūjī Qasār)に相談した。彼らは、それが本当でないことが分かると、その情報を無視した。(『集史』チンギス・カン紀, Rašīd/Topkapı 1518, fol.79a; Rašīd/Rawšan, p. 371)

1199年は、チンギス・カンとオン・カンが共同出兵を繰り返し、両者が勢力を拡大した時期であるが、この史料に見られるように、チンギス・カンはジョチ・カサルと相談して軍事行動を決定しており、ジョチ・カサルをかなり信頼していたことがわかる。

この1199年には、チンギス・カンとオン・カンは、ナイマン国を討つために共同出兵した。当時ナイマン国は、最も強力な敵の一つであり、とくにオン・カンにとっては宿敵であっ

5) 岡田英弘は、このベクテル殺害の話も含めて、『元朝秘史』のイエスゲイの結婚からチンギス・カンの第一次即位に至る一連の物語は、全く史実とは関係のない、自由な創作であるとしている(岡田英弘 1993, pp. 38-40, 52-53)。

た。しかし、遠征中にオン・カンとチンギス・カンの信頼関係が崩れ、双方とも別々に退却し、オン・カンの息子セングムと弟ジャカ・ガンプの部民をナイマン軍に一時略奪されるという事件が起きた。その後、チンギス・カンは、次の『聖武親征録』『元史』の記事に見られるように、オン・カンとの共同ではなく、弟ジョチ・カサルと協力して、ナイマン国討伐のために出兵した。チンギス・カンとジョチ・カサルは大勝し、ナイマン国はかなり大きな打撃を被ったため、「乃蠻の勢弱く、慮るに足らざる」状態になったという。この勝利は、チンギス・カンにとって最も信頼できる戦力がジョチ・カサルだったことを示している。

後上與弟哈撒兒討乃蠻部，至忽蘭蓋側山，大敗之，盡殺諸部衆，聚其尸焉。於時申號令還軍。時見乃蠻勢弱不足慮矣。（『聖武親征録』）  
 已而與皇弟哈撒兒，再伐乃蠻，拒闕於忽蘭蓋側山，大敗之，盡殺其諸將族衆，積屍以爲京觀，乃蠻之勢遂弱。（『元史』卷1，太祖本紀）

チンギス・カンは、1203年にオン・カンのケレイト王国を滅ぼすと、残された大きな敵はナイマン国だけとなった。そのナイマン国との決戦では、ジョチ・カサルの実力を買って、彼に中軍の指揮を命じた。その時の事情について、『集史』には次のように書かれている<sup>6)</sup>。

（ジョチ・カサルは）オン・カンとの戦いの時、彼（チンギス・カン）から離れていたし、それ以外にも何度か彼に罪が帰せられるようなことが起こった。しかし、チンギス・カンがナイマン王のタヤン・カン（Tāyāng Hān）と戦った大戦争の時に、チンギス・カンは、カサル（Qasār）に中軍を指揮するように命じ、彼はその戦いで努力し奮闘した。そのため、チンギス・カンは彼に恩賜した。（『集史』イエスゲイ・バートル紀，Rašīd/Uzбекистан 1620, fol.50b; Rašīd/Топкари 1518, fol.59a; Rašīd/Rawšan p. 275）

この記事の中に「何度か彼に罪が帰せられるようなことが起こった」とあるのは、チンギス・カンとジョチ・カサルの間にトラブルが発生したことを述べているが、これについては次章で詳述する。このころ、チンギス・カンとジョチ・カサルの間に不和が生じ始めていたが、チンギス・カンとしてはモンゴル高原の遊牧諸部族を統一するためにはジョチ・カサルの戦力に頼らざるを得ず、重要なナイマン王国との決戦においてジョチ・カサルに中軍の指揮を命じたのである。

1206年にチンギス・カンが即位し、モンゴル帝国が建国された後も、チンギス・カンがジョチ・カサルの力に頼る事件があった。それはシャーマンのテブ・テンゲリの殺害事件である。この事件は、これまでの研究では『元朝秘史』にもとづいて言及されることが多かったが、それが誤りであることについては別稿で詳述した<sup>7)</sup>。この事件について、『元朝秘史』

6) ナイマン国との決戦においてジョチ・カサルが中軍を指揮したことについては、『聖武親征録』『元史』には次のように簡単に書かれている。「上以弟哈撒兒主中軍，躬自指揮行陳。」（『聖武親征録』），「帝以哈撒兒主中軍」（『元史』卷1，太祖本紀）。

7) 宇野伸浩 2009, pp. 64–68.

と『集史』の記述に大きな相違があるが、『集史』の記述にもとづいて考えるべきである。少し長くなるが、以下にテブ・テンゲリ殺害事件に関する『集史』の記事を引用してみたい。

一番目の息子コンゴタン (Qūnkqutān)。この語の意味は「大鼻」である。彼がそうであったので、そのためにこの名がつけられた。彼の子孫から大アミールたちが出た。チンギス・カンの時代にいたモンリク・エチゲ (Munklīk Īcike) は、彼の子孫であった。オン・カン (Ūnk Hān) が策略を用い、娘をチンギス・カンの息子に与えるという口実をもうけて、チンギス・カンに息子を連れて自分のもとに来るように求めた。チンギス・カンは、途中で、モンリク・エチゲの家に下馬し、彼に相談した。彼はチンギス・カンを引きとめ、オン・カンのもとに行かせなかった。彼は、困難なときも安楽なときも、恐ろしいときも希望があるときも、いつもチンギス・カンの味方であった。チンギス・カンは自分の母ホエルン・エケ (Ūālūn Īke) を彼に与え、彼を全アミールたちの上座、すなわちチンギス・カンの隣に右手に座らせた。彼にはココチュ (Kūkujū) という名の息子がおり、モンゴル人は彼をテブ・テンゲリ (Teb Tenkerī) と呼んでいた。彼は常に目に見えない世界や未来のことを伝え、「神が私と話をし、私は天に昇る」と話していた。彼はチンギス・カンの前に来るたびに、「神は汝が世界の帝王になるだろうとおしゃっている」と言った。「チンギス・カン」の称号を与えたのは彼であり、「神の命令により、汝の名はこのようではなければならない」と言った。(中略) テブ・テンゲリは、真冬に、その地方で最も寒い所であるオノン (Ūnān) 河、ケルレン (Kelūrān) 河の地で、裸で氷水の中に座るのが習慣となっていた。彼の体温で氷が溶け、その水から蒸気が上がった。モンゴル人の民衆の間で各人が話して有名になったことは、彼が灰色の馬に乗って天に昇るということである。この話は民衆の話にありがちな誇張・嘘であるが、彼の言葉には欺瞞と偽りがあった。彼は、チンギス・カンに対して失礼なことを言ったが、温和な性格のところもあり、チンギス・カンの助けになることもあったので、チンギス・カンに気に入られていた。その後、彼はどのような話題にでも池ほどの多くのことを言い、高慢であり傲慢であったので、チンギス・カンは、最高の聡明さによって、彼がペテンであり偽善的であることに気がついた。

ある日、チンギス・カンは、自分の弟のジョチ・カサル (Jūjī Qasār) に、決意して、「彼がオールドにやって来て、失礼なことを始めるや否や、殺すように」と命じた。ジョチ・カサルは、非常に力の強い勇者であり、人を両手でつかんで、その人の背を細い棒のようにへし折るほどであった。ついに、テブ・テンゲリがやって来て、失礼なことを始めたので、ジョチ・カサルは、彼を二、三度足で蹴り、オールドから外に投げ出して殺した。彼の父は、自分の場所に座っていて、彼の帽子を拾い上げた。よもや息子が殺されるとは思っていなかったが、彼が殺されても黙ったままだった。(『集史』部族誌オロ

ナウト族の項, Rašīd/Али-заде 1-1, pp. 417–422; Rašīd/Majlis 2294, fol.33b–34a) コンゴタン族のモンリクは、オン・カンと敵対したチンギス・カンの窮地を救い、チンギス・カンの即位後に家臣の武将の中で高い地位（右翼の千人隊長）につき、チンギス・カンの母ホエルン・エケと再婚した人物である。上の『集史』の記述によると、その息子のシャーマンのテブ・テンゲリは、「チンギス・カン」の称号をテムジンに与える役割を果たした。チンギス・カンの即位後、テブ・テンゲリがチンギス・カンに対して傲慢な態度をとるようになった。そのために、チンギス・カンは弟ジョチ・カサルに命じてテブ・テンゲリを殺害させたのである。おそらく、母ホエルンが再婚した結果、義理の弟となっていたテブ・テンゲリを殺害することは、母ホエルンをはじめ周囲の反感を買う事件であったと思われるが、ジョチ・カサルの協力を得て実行に移すことができたのである。この事件からも、チンギス・カンにとってジョチ・カサルが重要な味方であったことが分かる。

#### 4. チンギス・カンとの対立

前章で述べたように、チンギス・カンとジョチ・カサルの間には強い協力関係があったが、しかし両者の間にトラブルも生じていた。おそらく、1201年頃からチンギス・カンとジョチ・カサルの上に波風が立ち始めたと考えられる。その頃、チンギス・カンはオン・カンと手を結び、モンゴル諸部族の連合軍と敵対していたが、チンギス・カンの妻ボルテの一族であるコンギラト族がチンギス・カン側に味方しようとしていた。しかし、次の『聖武親征録』『元史』の記事に見られるように、チンギス・カンと別行動をとっていたジョチ・カサルが誤ってコンギラト族を攻撃してしまった。そのため、コンギラト族は敵のジャムカ側についてしまったのである。

時弘吉刺部亦來附。上弟哈撒兒居別所，從其麾下哲不哥之計，往掠之。上深切責。於是弘吉刺遂附札木合，與亦乞剌思，火羅剌思，朶魯班，塔塔兒，哈答斤，散只兀諸部，會於犍河，共立札木合為局兒可汗，謀欲侵我，盟於禿律別兒河岸。（『聖武親征録』）

時弘吉刺部欲來附。哈撒兒不知其意，往掠之。於是弘吉刺歸札木合部，與朶魯班，亦乞剌思，哈答斤，火魯剌思，塔塔兒，散只兀諸部，會于犍河，共立札木合為局兒罕，盟于禿律別兒河岸。（『元史』卷1，太祖本紀）

この事件について、『集史』には次のように書かれており、チンギス・カンがこのことでジョチ・カサルに対して怒り、叱責したことがわかる。

ジョチ・カサル (Jūjī Qasār) はこのときチンギス・カンから離れていて、ジェベが彼の下にいた。コンギラト族は、(チンギス・カンと) 友好関係があり、チンギス・カンのもとに来てイルになることを望んでいた。ジェベは、ジョチ・カサルを刺激し扇動し、コ

ンギラトを敗走させた。彼らは（チンギス・カンのイルになろうと）決意したことを後悔し、信頼しなくなった。このことのために、チンギス・カンはジョチ・カサルに対して怒り、彼を叱責した。（『集史』チンギス・カン紀, Rašīd/Topkapı 1518, fol.80b; Rašīd/Rawšan, pp. 376–377）

また、1200～12年に、チンギス・カンは数度にわたってタタル族を破り、多くのタタル族を捕虜にした。チンギス・カンは、そのタタル族の捕虜のうち1000人をカサルに渡し、その処刑を命じた。しかし、タタル族からカトンに娶っていたカサルは、彼女の取りなしもあって、500人だけ殺し、残りの500人をこっそり隠した。その結末は、『集史』部族誌タタル族の項に次のように書かれている。

彼ら（タタル族）は、チンギス・カンと彼の先祖の殺人者・敵であったため、彼（チンギス・カン）は、彼らを完全に殺害しひとりも生かしておかないように命じ、「女どもも子供たちも殺すように。完全に滅びるように、妊婦の腹を割くように。反抗や反乱のもとであり、チンギス・カンの親族の諸部族から多くの者が殺されたのだから。」というヤサク（yāsāq）を命じるに至った。誰にもその部族を守る、あるいは彼らを隠すチャンスはなかった。彼らの中から生き残った何人かの者たちは、自分が生き残ったことを知らせた。ところで、チンギス・カンの治世の初期に、またその後にも、モンゴル族とモンゴル族以外の部族もタタル族から娘を自分と自分の一族のために娶り、彼らにも与えた。チンギス・カンも彼らから娘を娶ったので、彼のカトンの中でイスルン（Yīsūlūn）とイスカト（Yīsūkāt）はタタル族出身である。チンギス・カンの年上の弟であるジョチ・カサル（Jūjī Qasār）もカトンを彼らから娶った。大アミールたちも彼らの娘を娶っていた。そのため、彼らはタタル族の何人かの幼児をこっそり隠した。チンギス・カンはタタル族から1000人をジョチ・カサルに託して殺すように命じた。彼は、自分のカトンの意見ととりなしによって、全体のうち500人を殺し、500人を隠した。その後、チンギス・カンがそのことを知ると、ジョチ・カサルに対して怒っておっしゃった『ジョチ・カサルの罪の一つはこれである。彼には他に一、二の罪がある』と。これについては彼の物語の中で説明されるだろう。チンギス・カンがタタル族に対して怒り彼らを滅亡させた後に、少数の人々があちこちにそれぞれの理由で生き残った。彼らが隠した幼児は、オールドやタタル族出身のアミールたち、カトンたちの家で育てられた。殺されなかった妊婦たちからは子供が生まれた。（『集史』部族誌タタル族の項, Rašīd/Али-заде 1–1, pp. 175–177; Rašīd/Majlis 2294, fol.18a）

チンギス・カンは、ジョチ・カサルに対して激しく怒り、「ジョチ・カサルの罪の一つはこれである。彼には他に一、二の罪がある」と言っており、ジョチ・カサルを非難したことが分かる。

このように、チンギス・カンとジョチ・カサルの間にいくつかのトラブルが発生し、チン



ギス・カンのジョチ・カサルに対する不満が生じていた。しかし、前章で述べたように、チンギス・カンが敵対勢力に勝つためには、戦力の点ではジョチ・カサルに頼らざるを得ないという事情もあったのである。

## 5. ジョチ・カサルへの分封

チンギス・カンは、諸子・諸弟に対して、部民を分与するとともに遊牧地を分与する分封を行った。この分封については、日本において実証的な研究が進み、本田実信、杉山正明による研究があり、詳しく明らかにされている<sup>8)</sup>。分与した部民数については、『元朝秘史』と『集史』の間に違いがあるが、『集史』の記述が正しいとされ、ジョチ・カサルに与えられた部民数は、僅か一千人であり<sup>9)</sup>、テムゲ・オッチゲンの五千人、カチウンの息子アルチダイの三千人よりかなり少ないことが判明した。分封した時期は、杉山説によれば、1206年に即位したあと、1207～1211年の間であり、分与した遊牧地は、息子達にはモンゴル高原西部のアルタイ地方を、弟達には東部の大興安嶺西麓地方を与えた。ジョチ・カサルに与えられた遊牧地は、大興安嶺以西、ハイラル河以北のアルゲン河流域であった。アルゲン河右岸にある黒山頭古城がジョチ・カサル家の王宮址であることは、景愛、杉山正明によって実証されている。筆者は1994年8月にこの黒山頭古城を訪れ、遺跡を実見することができた。遺跡として管理されているため、土塁、城門跡などの保存状態はよい。

ところで、前述のように、ジョチ・カサルに与えられた部民数は一千人であり、テムゲ・オッチゲンの五千人、カチウンの息子アルチダイの三千人よりかなり少ない。モンゴル統一にほとんど貢献していないカチウン家よりも少ないのは奇異であり、ジョチ・カサルとチンギス・カンの対立が反映されている可能性が考えられる。

『元朝秘史』244節には、テブ・テンゲリ殺害事件にいたる対立の中で、チンギス・カンがジョチ・カサルの反逆を疑い彼に与えた部民を減らしたことを述べた記述がある。これを傍証する史料が他になく、またテブ・テンゲリ殺害事件については、上述のように『元朝秘史』のストーリーは大きく脚色されているため、244節に書かれているとおりの理由でジョチ・カサルの部民が減らされたとは考えにくい。しかし、『元朝秘史』の記述はまったくのフィク

8) 本田実信 1953, 杉山正明 1978.

9) 『集史』チンギス・カン紀には「チンギス・カンの甥にあたる、ジョチ・カサルの息子のイエグウ、トゥク、イエスンゲ。一千人。チンギス・カンは、別々の場所から(集めた)この千人隊を自分の甥であるジョチ・カサルの息子たちに与えた。」(Rašīd/Узбекистан 1620, fol.103b; Rašīd/Топкари 1518, fol.132a; Rašīd/Rawšan, p. 610)とあり、チンギス・カンがジョチ・カサル家の部民を分与した相手は、ジョチ・カサルの息子たちであると記されている。『集史』の記述は、ジョチ・カサルの死後に、ジョチ・カサルの息子たちに与えた部民が一千人だったことを記していると解釈できる。

ションではなく、何か1つの史実を大きく脚色している場合が多いため、ジョチ・カサルの一部民数削減についてももともとなった史実があった可能性はある。杉山正明は、東方諸弟ウルスの力の不均衡を考える上で、『元朝秘史』のテブ・テンゲリ殺害事件の逸話がヒントになると指摘している<sup>10)</sup>。

## 6. ジョチ・カサルの死

ジョチ・カサルは、1211年から始まったチンギス・カンの金国遠征に、弟のオッチギンとともに左翼軍として参加し、次の『元史』の史料に見られるように、1213年（太祖八年）に遼西方面に進軍した。しかし、それ以後になると、ジョチ・カサルの名が史料にまったく現われなくなる。

（太祖八年）皇弟哈撒兒カサル及斡陳那顔オチン・ノヤン，拙赤解ジョルチダイ，薄剌ボチャ為左軍，遵海而東，取薊州，平，灤，遼西諸郡而還。（『元史』卷1，太祖本紀）

一方、南宋の孟珙が、華北に駐屯していたモンゴル軍のもとに派遣され、そのときの伝聞を1221年に記した『蒙鞞備録』には、

大皇弟久已陣亡（『蒙鞞備録』「太子諸王」）

とある。ここには、チンギス・カンの「大皇弟」は、だいぶ以前に戦死したと書かれていて、これはジョチ・カサルのことを指すらしい。ジョチ・カサルの没年は不明であるが、『元朝秘史』253節には、ジョチ・カサルが金国遠征から無事帰還したかのように書かれているが、このような状況から判断して、ジョチ・カサルは遼西方面で遠征中に戦死した可能性がある。

## 7. ま と め

12世紀末から13世紀初頭のモンゴル高原の遊牧諸部族中で少数勢力であったチンギス・カンが勢力を拡大していくためには、オン・カンとの同盟が不可欠であり、二人の共同戦線が遊牧諸部族を統一する力を生み出したが、個々の戦闘を見てみると、ジョチ・カサルが重要な戦力としてチンギス・カンを支えていた。1203年にチンギス・カンとオン・カンの間で不和が生じて両者が決裂し、チンギス・カンがオン・カンの襲撃を受けた時がチンギス・カンにとって生涯最大の危機であったが、このときジョチ・カサルはチンギス・カンと別行動をとっていた。このこともチンギス・カンが敗走せざるを得なかった原因の一つであると思われる。その後、ジョチ・カサルとチンギス・カンが合流したことにより、反撃の計略が立て

10) 杉山正明 1992, pp. 76–77参照。

られ、その計略が見事に成功し、オン・カンのケレイト王国を滅ぼした。岡田英弘が指摘しているように、ジョチ・カサルと合流したことがチンギス・カンの反撃への転機となった（岡田英弘1993, p. 103）。

このように、ジョチ・カサルはチンギス・カン陣営にとって最も重要な戦力であった。しかし、一方では、チンギス・カンとジョチ・カサルの間いきびしい対立があり、チンギス・カンが「ジョチ・カサルの罪の一つはこれである。彼には他に一、二の罪がある」と言って激しく非難することさえあった。従来、両者の対立があまり注目されてこなかったのは、『元朝秘史』が、チンギス・カンがジョチ・カサルを非難した事件についてまったく言及していないためである。

ジョチ・カサルが武力の点ではチンギス・カンを上回る力を持っており、そしてチンギス・カンとの間に激しい対立があったとすれば、『元朝秘史』が暗示するように、また杉山正明が指摘するように、その結果としてジョチ・カサル家への部民数が一千人になったということは十分に考えられることである。

#### 付記

本稿は2012年度広島修道大学学術交流センター調査研究費による調査研究の成果発表の一部である。

#### 《『集史』校訂テキスト・写本一覧》

- Rašīd/Ализаде 1-1 : А.А.Али-заде (ed.), *Фазлаллах Рашид ад-Дин, Джамии ат-Таварих*. Том I, Часть 1, Москва, 1965.
- Rašīd/Rawšan : M. Rawšan & M. Mūsawī (ed.), *Jāmi' al-Tawārīḥ*, 4vols., Tehran, 1373/1994.
- Rašīd/Majlis 2294 : イスラム議会図書館 Kitābhāna-yi Majlis-i Shūrā-yi Islāmī, MS. 2294.
- Rašīd/Узбекистан 1620 : ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所 Институт Востоковедения Академии Наук Республики Узбекистан (Abu Rayhon Beruni Institute of Oriental Studies), Ташкент, MS. 1620.
- Rašīd/Топкари 1518 : トプカブ・サライ博物館附属図書館 Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, MS. Rewān köşkü 1518.

#### 《参 考 文 献》

##### 1. 欧米文献

Allsen, Thomas

- 1994 “The Rise of the Mongolian Empire and Mongolian Rule in North China”, Herbert Franke and Denis Twitchett (ed.), *The Cambridge History of China vol.6: Alien Regimes and Border States, 907–1368*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 321–413.

Biran, Michal

- 2007 *Chinggis Khan*, Oxford: Oneworld Publications.

- Lane, George  
2004 *Genghis Khan and Mongol Rule*, Westport: Greenwood Press.
- Man, John  
2004 *Genghis Khan: Life, Death and Resurrection*, New York: St. Martin's Press. 邦訳：マン2006.
- Morgan, David  
1986 *The Mongols*, Oxford: Basil Blackwell. 邦訳：モーガン1993.
- Okada Hidehiro  
1972 “The Secret History of the Mongols, a pseudo-historical novel”, 『アジア・アフリカ言語文化研究』5, pp. 61–67.
- Ratchnevsky, Paul  
1983 *Činggis-khan, sein Leben und Wirken*, Wiesbaden. 英訳：Ratchnevsky 1991.  
1991 *Genghis Khan: His Life and Legacy*, Oxford: Basil Blackwell.
- Togan, İsenbike  
1998 *Flexibility and Limitation in Steppe Formations: The Kerait Khanate and Chinggis Khan*, Leiden: Brill.
- Weatherford, Jack  
2004 *Genghis Khan and the Making of the Modern World*, New York. 邦訳：ウェザーフォード 2006.
- Yoshida Jun'ichi  
1992 “On the battle of Köyiten”, *Olon Ulsyn Mongol Erdemtniy V ikh khural 1 bot*, Olon Ulsyn Mongol Sudalyn Kholboo, Ulaanbaatar, pp. 400–404.

## 2. 日本語・中国語文献

ウェザーフォード, ジャック

- 2006 『バックス・モンゴリカ：チンギス・ハンがつくった新世界』日本放送出版協会。

宇野伸浩

- 1991a 「兄の覇業を支えた勇猛なる弟たち」『草原の英雄“蒼き狼”の覇業』（歴史群像シリーズ25号：チンギス・ハーン上巻），学習研究社，pp. 154–157.  
1991b 「根本史料を比較する 英雄の偉業を伝える『秘史』と『集史』」『草原の英雄“蒼き狼”の覇業』（歴史群像シリーズ25号：チンギス・ハーン上巻），学習研究社，pp. 182–185.  
1993 「モンゴルにおける文字文化の発生と『元朝秘史』」『史滴』14, pp. 50–54.  
2009 「チンギス・ハン前半生研究のための『元朝秘史』と『集史』の比較研究」『人間環境学研究』7, pp. 57–74.

岡田英弘

- 1986 『チンギス・ハーン』（中国の英傑9）集英社。再版：『チンギス・ハーン』（朝日文庫660）朝日新聞社，1993年。

白石典之

- 2001 『チンギス＝カンの考古学』同成社。  
2006 『チンギス・カン：“蒼き狼”の実像』（中公新書1828）中央公論社。

杉山正明

- 1978 「モンゴル帝国の原像——チンギス・カンの一族分封をめぐる」『東洋史研究』37–1, pp. 1–34. 再録：杉山正明 2004, pp. 28–61.  
1992 『大モンゴルの世界——陸と海の巨大帝国』（角川選書227）角川書店。  
1993 「八不沙王の令旨碑より」『東洋史研究』52–3, pp. 435–484. 再録：杉山正明 2004, pp. 187–240.  
1997 「はるかなる大モンゴル帝国」杉山正明・北川誠一『大モンゴルの時代』（世界の歴史9）中央公論社，pp. 9–290.  
2004 『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会。

本田實信

- 1953 「チンギス・ハンの千戸——『元朝秘史』とラシード『集史』との比較を通じて」『史学雑誌』62–8, pp. 1–26. 再録：本田實信 1991, pp. 17–40.  
1991 『モンゴル時代史研究』東京大学出版会。

マン, ジョン

2006 『チングス・ハン：その生涯、死、そして復活』東京書籍。

モーガン

1993 『モンゴル帝国の歴史』（角川選書234）角川書店。

吉田順一

1968 「元朝秘史の歴史性——その年代記的側面の検討」『史観』78, pp. 40–56.

1986 「タイチウト部衆の来属——『聖武親聖録』・『集史』・『元史』太祖本紀の比較検討」『アジア史における年代記の研究』（文部省科学研究費研究成果報告書），pp. 62–72.

1993 「テムジンとオン＝カンの後期の関係——父子を言い交わしたという伝承の分析」『蒙古史研究』4, pp. 11–24.

1996 「テムジンとオン＝カンの前期の関係——二人の父子関係についての伝承の分析」南京大学元史研究室編『内陸亞洲歴史文化研究——韓儒林先生紀年論文集』南京：南京大学出版社，pp. 21–48.

2005 『『蒙古秘史』研究（“Mongγul-un niyuca tobciyan”-u sudulul）』北京：民族出版社。

2009a 『『モンゴル秘史』研究』『早稲田大学モンゴル研究所紀要』5, pp. 79–105.

2009b 「クイテンの戦いの実像」『早稲田大学モンゴル研究所紀要』5, pp. 107–117.

2011 「『モンゴル秘史』研究の新たな展開に向けて」吉田順一監修，早稲田大学モンゴル研究所編『モンゴル史研究』明石書店，pp. 9–23.

景愛

1980 「黒山頭古城」『吉林大学学報』社会科学版。